

英知通信



昭和50年7月1日

英知大学

No.13

入学おめでとう

きょうここに、多数のご父兄の方々のご参列を頂き、昭和五十年度英知大学入学式を挙行いたしますことは、本日入学された新入生の皆さんはもとより、本大学の教職員、在学生一同にとりましても大きな喜びであります。私はここに学長として、本大学を代表し、入学生の方々に、おめでとうと申し上げると共にご父兄の方々に對しまして心よりお祝い申し上げる次第であります。新入生の皆さんはきょうから英知大学生として大学生活をはじめられるわけ

大学生生活の目標

学長 岸英司

であります。これからの四年間をどのように生きていくかという問題は大切な事柄であります。私はきょうの皆さんの喜びの日にあたりまして、大学生活の目標について少しばかりお話ししたいと存じます。

大学とは何か

歴史的にみますと、大学という学校が人類の歴史に現われてまいりましたのは十二世紀の終りでありまして、ヨーロッパ中世には諸国から人が集まってきて勉強する *Studium Generale* という学校ができてまいりました。当時最も有名であったの

はパリとボローニアの学校でありました。これは各学科で教える学位 *Doctor* とか *Magister* を与える教育機関でありました。今日の大学 *University* に相当するラテン語の *Universitas* というのは根源的には *Studium Generale* の中の教授及び学生の団体・*Guild* のことでありました。十三世紀には *Universitas* は学問の総合 *Universitas Litterarum* の意味で用いられるようになり、十四世紀には今日私達が出身校を母校とよぶ最初の習慣、*Alma Mater* という言葉も使われ、*Studium Generale* と *Universitas* は同義語となっ

たのであります。これをみましても最初から大学 *Universitas* とは教授と学生との協同であり、学問の総合であり、それはまさに一つの社会、一つの世界なのであります。中世の大学は神学を中心として他の諸学、哲学、法学、医学などが発達していったものであります。英知大学はこのような大学発祥の歴史の伝統を重んじ、それに倣いつつ創立された大学であるということ先づご記憶願いたいのであります。

人間形成—教養

さて大学は高等教育研究機関であると言われますが大学の使命は学問

研究に、人間形成であります。ここでは単にそれぞれの学問の知識の獲得がめざされているのではなく、それと共に人間の形成つまり教養が求められているのであります。教養 *Culture* というのはラテン語の *Cultus* 又は *Cultura* からきておりますが、これらの言葉の第一義的意味は耕作、畑をたがやすことであり、これは土地を耕す、手入れするということの意味をもった動詞の *Colo*, *Colis*, *Colere* という言葉からでているためであります。教養とは何かということはこのことはよく教えております。すなわち、人間は生まれ



ながらにして教養があるわけではないのです。人間は生まれてから、自己を耕すこと、よく手入れをすること、すなわち学ぶことによつて教養を獲得してまいります。これは単なる知識 *Scientia* の事ではありませぬ。知識がその人の人格と何のかかわりももたない、単にその人の付属物とかアクセサリにすぎないような場合には教養はその人に存在してないものであります。

英知—サピエンチア

人が知識を獲得することによつて、教養をもつに至るためにはそこに何かなくてはなりません。知識

を指導し、完成するものがなくてはなりません。これを私は「英知」*Sapientia* と呼ぶのであります。旧約聖書の中に知恵の書 *Liber Sapientiae* というのがあります。これは英知の書といつてもよいのであります。その十章十二節にすばらしいことばがあります。

Omnium potentior est sapientia

「英知はすべてのものうちでより強いものである」という意味であります。英知大学はこの英知 *Sapientia* を建学の理想としている大学であり、ラテン語で *Universitas Sapientiae* と申します。大学の新館西にかかげられている聖母マリアとその御子キリストの像はこの大学のシンボルであります。ここでキリストは英知 *Sapientia* であり、それをもたらす母マリアこそは英知を生み育てる場、*"Sedes Sapientiae"* すなわち大学なのであります。大学とは聖母マリアのように英知を生みそだてる慈悲深き母、*Alma Mater* なのです。

先ほど読まれた旧約聖書箴言第十章第十一節から十四節は、英知 *Sapientia* の偉大さをよく教えておられます。

「正しい者の口は命の泉である。

悪しき者の口は暴虐を隠す。」

命の泉とは英知 *Sapientia* でありましてこれは正しい者の口といわれるように正しさをぬきにして英知は存在いたしません。

「憎しみは争いを起し、

愛はすべてのとがをおおう。」

英知 *Sapientia* とは真理への愛に外ならず愛はすべてのとがをおおうのです。

「さとき者のくちびるには
英知があり、
英知のない者の脊には
むちがある。」

英知とはさとき者であります。

「英知ある者は知識をたくわえる。
愚かな者のむだ口は、
今にも滅びをきたらせる。」

英知こそは知識をたくわえるのであります。以上の聖書の教えに導かれて、私達は次の事を知るのであります。大学生活の目標は英知に導かれながら知識をたくわえることによつ

文学部長に

アルバレス教授



山崎正雄教授の文学部長任期満了による辞任にともない、アルバレス教授が四月一日付で文学部長に就任した。ホセ・ルイス・アルバレス教授はイスパニアの出身でマドリッド大学より法学博士の学位を受け、昭和十年来日。昭和四十四年四月より本学イスパニア文学科で学科長を勤めながらイスパニア文学およびキリシタン研究においてユニークな学風をかもしだされておられ、その名は広く海外においても知られている。アルバレス教授はわが国における多年にわたる教育の功が認められ、昭和四十七年十一月、日本政府より勲三等瑞宝章を受けられた。

て人間を形成することすなわち教養を身につけることであるということでありませう。

ご承知のように英知大学はこのような理想を追求するカトリック大学であり、アメリカ、カナダにおける幾多のカトリック大学と国際的に結ばれた大学であります。皆さんはこの四年間に内外人の教授方と共に神学或いは文学の研究を通して、豊かな人間形成すなわち教養の人となられることを希望してやみません。教養は学問研究を前提としており、皆

なごやかで家庭的な

カトリック大学

—新教務課長金田一男氏に聞く—

本学は四月一日付で金田一男氏を教務課長として迎えた。同氏は長年関西学院大学の事務職を勤めてこられた教務のベテランであつただけに、本学での氏の活躍が大いに期待されている。そこで金田教務課長に本学についての感想を卒直に語っていただくことにした。

—本学に來られて最初
に受けた印象は—「何
はともあれ、極めて家
庭的でなごやかな大学
です。かねてよりその
ことはよくわかっておりまし
たが、こちらに來てみてそれが手にと
るようになりました。学生ひとり
ひとりの単位登録についても、傘木
教務部長は真剣になつて考えてくだ
さつていて、本当に頭が下がるよう
な思いです。つぎにいえることは、
本学の特徴はカトリック的な雰囲気
であるということだしいます。神



さんはそれぞれの学問研究のための地味な努力を怠つてはならないのです。学問研究は真理の存在を前提としており、皆さんは学問研究を通して人生における真理の存在に眼を開かれることでしよう。絶対なる真理—それは神に外なりません。英知大学は絶対なる真理—神の前にすべての人が平等であり、人はこの真理なる神によつて生かされるということに常に確信するものであります。教養の人である英知の人の養成、これが本大学の使命とするところであります。

—特に本学の学生に期待することは—
「何よりもまず実力を養つていただきたい。最初に与えられたチャンスをよく利用して『しっかり勉強せよ』と言つてやりたい気持ち一杯です。ガイダンスのときには、自分自身に関心のあることには聴くが、規程全般に関することにはやや無関心な様子です。もっと広い心でものごとを考へるひとなつていただきたいと思ひます。」

—本学の「良さ」について—「第一に少数教育であるという点にあると思ひます。学長先生をはじめとして諸先生方と学生との間に親しみがあふれており、個人指導がよく行きとどいてる感じがいたします。それに学生たちは規則を割合によく守つてゐるのではないでしようか。」

—ところで、金田氏は趣味として「人形劇研究所ラルカ・人形劇団さん

ます。

きょう入学された皆さんは、この建学の精神をよく理解され、世界に雄飛する人材となられる様祈つてやみません。またご父兄の方々におかれましては皆様の御息御息女が所期の目的を達成されるよう私達と協力され物心両面にわたつての温かいご保護とご指導を与えられるよう、また本大学に対しまして御援助を賜りますようお願いいたしまして私の式辞といたします。

昭和五十年四月九日

人 事

新任	教授	アルフレッド・メルシエ	四月一日付
神学科	教授	アルフレッド・メルシエ	
英文学科	助教授	ロバート・ウエスト	
昇格	助教授	玉直	四月一日付
一般教養	助教授	谷直実	
イスパニア	助教授	マリア・オンダラ	
同	助教授	マリア・デルコラール	
同	助教授	染田秀藤	
同	助教授	浦田裕貴	
同	助教授	谷真嗣	
同	助教授	谷真嗣	
同	助教授	谷真嗣	

昭和四十九年度就職状況

不況色の濃い社会に一一一名の卒業生がこの三月に巣立ち、そのうち八十二名が就職した。全学科を産業別にみると製造業33%、商事貿易19%、教育公務15%、金融6%、その他が25%となっている。就職率は前年度に下回っているにもかかわらず、大企業への進出が伸びていることがこの大きな特徴である。

昭和五十年度入学学生出身高校
本年度入学学生二六二名のうち大阪府49%、兵庫県33%を占め詳細は次のとおりである。()内は二名以上。
公立高校

- 吹田(7) 葦合(6) 神港(6) 須磨(6)
- 箕面(5) 山本(4) 河南(4) 泉北(3)
- 東豊中(3) 東淀川(3) 今宮工業(3)
- 登美丘(3) 伊丹(3) 御影(3) 有馬(3)
- (3) 明石北(3) 宝塚(2) 鈴蘭台(2)
- 播磨(2) 川西緑台(2) 市立尼崎(2)
- 相生産業(2) 高砂(2) 京都西(2)
- 桜宮(2) 福山(2) 宮津(2) 外国(2)
- 高松第一(2) 摂津、鳳、此花工業
- 布施、佐野、堺養護、大東、北淀
- 東住吉工業、泉尾、桃谷、赤塚山
- 南、清友、夢野台、村岡、神戸西
- 神戸盲学校、伊和、西宮東、長田
- 市立西宮、県立尼崎北、県立尼崎
- 郡上北、生駒、五条、星林、笠田
- 倉吉西、勝山、膳所、船津、土佐
- 宿毛、小松島、相可、金沢泉丘、
- 桜ヶ丘、直江津、能代北、北松南
- 検定
- 私立高校
- 大阪(9) 大阪女学院(8) 仁川学院
- (6) 報徳(5) 成器工業(5) 愛徳(4)
- 百合学院(4) 三田学院(4) 興国(4)
- 被昇天(4) ブール学院(3) 浪速(3)
- 清風(3) ノートルダム女学院(3)
- 此花学院(2) 信愛女学院(2) 北陽
- (2) 初芝(2) 大阪貿易(2) 上宮(2)
- 羽衣学院(2) 城星学院(2) 大阪学
- 院(2) 箕面自由学院(2) 四天王寺
- (2) 神戸海星(2) 神戸育英(2)
- (2) 聖母女学院(2) 平安(2) 聖マリア
- 女学院(2) 九州学院(2) 金蘭千里
- 樟蔭東、関西大倉、大阪商大附属
- 梅花、大阪韓国、桃山学院、薫英
- 宣真、住吉学園、大阪朝鮮、向陽
- 追手門学院、星光学院、明浄学院
- 清教学園、啓明、神戸朝鮮、日星
- 甲子園学院、清心女子、福岡雙葉
- 広陵、長崎南山

ことばに関わるということ

前田 田 総助 (フランス文学科助教)



思うに 二十才を はさむ数年はまさに黄金の季節である

諸君は、幸か不幸か英知大学文学部に籍を置き、否応なしにことばと特別なかわり合いを持たねばならないのですが、そもそもことばに関わるとは何なのか、もう一度考えてもらいたいと思います。

ある意味で、ことばとはまことに貧しいものです。それは所詮符号であって、「あるもの」を意味するが「あるものそのもの」ではない。ある社会の約束にもとづいて、ある存在を指示するが、存在を開示しない。存在を開示するよりはむしろかくすように働く、ともいえると思います。例えば、「赤犬」の赤と、「赤いポスト」の赤は、どれほど違つた「赤」を語っていることでしょうか。「赤」はその色についてなんといい加減に語っていることでしょうか。白から黒まで、無限のヴァリエーションを奏でる自然の色相変化に 一対一対応する「ことば」などない。微妙なニュアンスの相違を見せながら千変万化して立ち現れてくる、目前の、現実の「色」を開示する決定的なことばはない。たかが色彩一つを例にとつてみても、その無限の連続を限られたことばをもって追いかける行為が、どれほど絶望的であるかは明白である。「ことば」はゼノンのアキレスのように、遂に「存在」の亀には追いつけないのです。

一枚の間取図は、いかなることばにもまして雄弁に、ある住居の構造について語る。騒然たる群衆を静め

るためなら、静かな楽の調べか、或はむしろピストルの号音一発の方がより効果的だ。百万言を費そうとも、ことばは一枚の写真が描き出す風景描写には及ばない、とも言える。最も深刻な真実は沈黙の中に進行する。「なんにも言わずに眼に涙」が最高の表現である場合があり、その際ことばの出る幕はない。まことに、ことばは無力と言うべきでありましょう。

だが、それとともにまた、ことばは人間のすみかであり、精神はことばと密接に燃り合わされているのであり、ことばと関わることなしに精神の成熟はない、とも言えるのであります。

「江碧鳥逾白、山青花欲然、今春看又過、何日是歸年。」ご存じ、有名な杜甫の五絶であります。今これを読む私たちには、詩人が目前にしていた千年前の江南の春景色は決して如実には浮んでこないのですが、しかし、風景に相對する、無量の憂いを秘めた詩人のまなざしと、その奥にある心の姿は、惻々として私たちに伝わってくるのです。抒情詩だから特別なわけではありません。そもそも、ことばは描写にすぐれた手段ではないとしても、このような心の姿勢を語り伝える手段としては最もすぐれたものです。なにも特殊なぜいたくとしてのブンガクについて語っているわけではありません。「アイ・ラヴ・ユー」が不実なるささやきであることもあれば、「バカヤロー」が過熱せる愛の絶叫である場合もあります。巧言令色に仁鮮いこともあれば、剛毅朴訥が仁に近いこともあります。そして私たちは、日常不

断に、そのような様々のことばの意味を、生活の文脈の中に置いて、その背後にある話者の心の姿を、聞きわけ嗅ぎわけつつ生きていくはずで

人は自然発生的に直立した二足獣ではありませぬ。幼時、人々の間に育つことよって、他人の身体体位を受胎して自らの身体図式を整えつつ、漸く直立したものであることは、かの狼少年の反例に照しても明らかであります。であつてみれば同様に、私たちの精神も、積極的

図書館報告

卒業生より図書寄贈される

昭和四十九年度卒業生一同より本学図書館へ東洋文庫全二六五冊(二十一万四千八百五十円相当)が卒業記念として寄贈されました。大いにご利用ください。

昭和49年度入館者および利用回数統計

入館者数	11,497人
開館日数	267日
一日平均	43人
館外帯出	3,387冊
館内閲覧	546冊
計	3,933冊

昭和49年度受入冊数および所蔵冊数

	人文科学関係		社会科学関係		自然科学関係		英語・英文学関係		イスパニア語 イスパニア文学 関係		仏語・仏文学関係		神学関係		保健体育関係		その他		合計
	和	洋	和	洋	和	洋	和	洋	和	洋	和	洋	和	洋	和	洋	和	洋	
受入冊数	358	170	321	34	40	1	73	198	11	334	53	257	101	537	24		416	67	2,995
所蔵冊数	4,859	1,374	3,259	605	1,585	81	2,739	4,367	260	5,066	1,255	4,169	2,456	7,225	358		12,414	595	42,668

研究室便り

○大園義興副学長 (フランス語) は、このたび日本カトリック聖年公式巡礼団および聖年行事日本委員会が企画した「ハンドブック」(株式会社バックス・エンタープライズ発行)のために『パリ』についての記事を執筆した。

これは同教授が五年間におよぶ滞在中の幅広い見聞と研究にもとづいて、パリの風物を歴史的、宗教的にとらえたもので、「声」誌連載の『万葉の旅』、『文学の旅』とあわせて、教授の教養の豊かさがうかがわれるものである。

○ゲラリエル・ベーク教授 (神学) は、「道の世界」Die Welt des Tao という題名の著書をハンブルグとミュンヘンにてドイツ語で出版した。またハンガリーのカトリック月刊誌「ア・スジング」に『イス

本学元助教西田保先生の 一周忌ミサ

昭和四十九年三月退職まで本学でラテン語を教えておられた西田保助教は去年四月十七日、ガン性腹膜炎のため帰天されたが、去る四月二十六日午後二時より園田カトリック教会において故人のために一周忌のミサが捧げられ、遺族を代表して訪問姉妹会のシスター西田をはじめ、神学科生、ヨゼフ会シスターたちがこれにあずかった。故人と公私ともどもに深い関係があった岸英司学長が約二十分にわたって助教としてまた司祭としての西田先生の思い出を語った。

ラエルの信仰」という論文を発表した。

以上のほか、ハワイ大学の学術誌 Journal of Chinese Philosophy に『道と徳』(Tao and his power) という題名の論文を発表しており、また Abel Japánban という著書がまもなく出版される予定である。

○西山俊彦教授 (社会学・社会心理学) は、昨年十二月、日本グループ、ダイナミックス学会より発行する「実験社会心理学研究」(第十四号第2号)に『宗教的パースナリティの自我機制—権威主義尺度による「アプローチ」』と題して論文を発表した。この論文は日本社会心理学会の「年報社会心理学」誌に発表予定のところ、石油ショックの影響で駄目になったが、折紙つきの論文として高く評価されている。

○井上博嗣助教 (英米文学) は、四月四日、京都外国語大学において開かれた第九回アメリカ学会年次大会において「オニールの『毛猿』における人間疎外」という題名のもとに研究発表を行った。

また南山短期大学の田中良子講師とともに、『毛猿』の注解つきテキストを四月十日大阪教育図書より出版した。

○染田秀藤助教

(イスパニア文学) は、アンリ・ラペール著「カール五世」を翻訳し、四月五日、白水社より「文庫クセジュ」五七四として出版した。本書は、十六世紀ヨーロッパ神聖ローマ帝国を統治した皇帝カール五世と宗教改革、農民戦争、オスマン・トルコの侵略、新

大陸の征服など動揺のはげしかった時代背景を生き生きと描き出している。

なお、翻訳の完了するにあたり、染田助教はつぎのように感想を述べている。

「この分野はわが国ではあまり知られていなかっただけに、このたび紹介させていただいたことを非常に喜ばしく思っております。本書の原典がフランス語であったために翻訳には苦労しましたが、フランス文学科の前田先生がご援助、ご忠告を与えてくださったことに対して深く感謝しております。」と。

英知大学後援会便り

◎第一回後援会総会の報告

四月十一日の入学式に引続いて、本館三階三〇一教室に会員が参集して第一回総会を開く。

先ず山口会長より、後援会の趣旨に賛同をいただき、全員ご入会下さったことに対し、謝辞があり、次に岸学長より皆さまのご誠意に感謝し、ご子弟の教育に一意専念して、ご厚意に酬いる所存であることを述べ、次いで山口会長が議長席につき議事にはいる。

- 1. 昭和四十九年度事業並に収支決算承認の件、については山口会長より説明があり、引続いて、中畑監査より監査報告があつて、満場一致承認。「決算書は前号十二号に掲載しましたので省略」
- 2. 昭和五十年役員選出の件 山口会長は、会則に基づき、会長・副会長・監査を総会で選

英知大学後援会昭和50年度予算書

Table with 3 columns: 項目 (Item), 金額 (Amount), 備考 (Remarks). It details the budget for the 50th anniversary, including income from membership fees and expenses for publications and administrative costs.

出すことになってはいるが、如何なる方法によつて選出すべきかを総会にはかつたところ、すべて議長に一任という動機が提出され、その動機が採択されたので、会長の指名によつて、満場一致留任に決定。

編集後記

何年振りかで母校を訪ねてくる卒業生は大学はよくなったという。たしかに正門は広くなり、グラウンドは整備され、キャンパスには一段とみどりが濃くなった。山陽新幹線からは、新館の屋上に「英知大学」と明示されたサインが目につく。

英知通信

昭和五十年七月一日発行 編集者 英知大学 学長広報室 兵庫県尼崎市若王寺苗田 (06)四九一—五〇〇八三 六六一